家族成員間の相互作用の性質と青年の自己表現能力との関連

―家族の偽相互性の観点から―

井村文音・石田　弓

Relationship between interaction with family members and youth's assertion skill: Focusing on pseudo mutuality

Ayane Imura and Yumi Ishida

家族成員との交流の中で，自身の同一性の発達よりも家族全体の安定性を優先し，表面的に強く調和する関係性を偽相互性という。現代青年には，友人との間で自己開示を求めながらも，円滑な人間関係の維持に重点を置き，発言を抑制する傾向がある。この傾向は，偽相互性に見られる相手を優先するために自己を抑制し，不十分にしか自身の思いを表現できないノン・アサーティブな自己表現の特徴と類似する。本研究は，家族機能状態に着目して偽相互性の特徴を想定し，家族成員間の相互作用の状態と青年の発言抑制傾向との関連性を検討することを目的とした。研究 1 では，家族の偽相互性を想定した家族機能状態と青年の発言抑制傾向との関連性は明らかにされなかったが，家族機能の凝集性，及び適応性のそれぞれの側面と発言抑制傾向との関連性が示唆された。研究 2 では，シンボル配置技法の 1 つである家族イメージ法を用いた調査を行い，青年がイメージする家族機能状態や家族成員間の相互作用の状態と青年の発言抑制傾向との関連性を明らかにした。

キーワード：家族機能状態，偽相互性，発言抑制傾向，家族イメージ法

問題・目的

1．家族の偽相互性

家族は，我々が生まれながらにして所属する社会集団であり，家族成員との交流を通して，他者との社会的な相互作用を習得する (八木, 2010)。また，我々が個人としてのパーソナリティを形成し，自己同一性を獲得・維持するには家族成員間の相互作用が重要である (Minuchin, 1974)。このように家族成員との相互作用と自己同一性の確立は補完し合う関係であり，家族内での他者との関係性維持の欲求と，自己同一性の確立の欲求を平衡に保つことは，個人の心理的発達と対人関係などの社会性の発達に影響を及ぼす点で重要であると考えられる。しかし，家族成員が自身の同一性の発達よりも家族全体の安定性を得るために，他の家族成員への調和を優先する関係性を偽相互性 (pseudo mutuality) という (Wynne, Ryckoff, Day, & Hirsch, 1958)。

偽相互性は，「家族病因論」が台頭した 1950 年代後半の米国において，統合失調症発症のメカニズムを説明するために用いられた中心的な概念である (南山, 2002)。偽相互性は，1) 役割構造からの普遍性，2) この役割構造が望ましく適切なものであるという主張，3) この役割構造からの独立に対する憂慮，4) 自発性，ユーモア，活気の欠如という特徴を持つ (Wynne et al, 1958)。偽相互の関係では，自己同一性を保ちながら他人との関係を持つというバランスが崩れてしまい，相手のことを尊重しすぎるあまりに自分の気持ちを押し殺し，良好な関係を保とうとする (Foley, 1974)。そのため，偽相互性の家族における家族成員は，家族関係は良好であると表面的には主張するが，実際は自身の欲求を抑制しており，強い葛藤やストレスを抱いていると考えられる。また，偽相互性の家族では，家族成員の個としての同一性の確立は，家族システム全体のまとまりや親密さを破綻する点で脅威と見なされる (Wynne et al, 1958)。このような家族において個人は他の家族成員やその場の状況に適応しようとするあまり，個としての独自性を見失い，自己同一性の確立が困難になると考えられる。

2. 自己主張能力

我々の生活において，他者とのコミュニケーションは非常に重要であり，コミュニケーションの場において自己表現が行われる (用松・坂中, 2004)。自己表現には，アグレッシブ (自分の意見や考えをはっきりと言うことで，相手のいい分野気持ちを無視，軽視して，結果的に相手に自分を押し付ける言動)，ノン・アサーティブ (自分の気持ちや考えを表現しない，または表現し損なうような言動。相手のことを優先し，自分の表現は大切にしない自己表現であり，相手に合わせたり，揉め事を起こさないために自分を抑制する)，アサーティブ (自己表現を大切にしながら，相手のことも大切にする) の 3 つのタイプがある (平木, 1993; 用松・坂中, 2004)。井上 (2007) は，我々が他者との相互作用において，自身の考え，価値観，信念が他者との共有できずに抱える葛藤を解決する一つの手掛かりとして，アサーションを取り上げた。アサーションは，家族との関わりや集団生活による他者との関わりの中で育まれ，自己実現や精神的健康を高め，他者との親密な関わりを築くために有効であるとされているため (井上, 2007)，適切なアサーション能力を育むには，家族成員間の相互作用のあり方が有用であると考えられる。

3. 偽相互性と自己表現能力との関連性

他者との関係性を保つ際に自己表現が上手くできずに相手に合わせてしまう偽相互性の特徴は，相手を優先したり相手に合わせるために，自分を抑制し自己表現をしなかったり，不十分にしか自分の思いを伝えられない (用松・坂中, 2004) ノン・アサーティブな自己表現の特徴と類似していると思われる。堀川・柴山 (2006) は，現代青年の対人特徴として友人との間で自己開示を求めながらも，円滑な人間関係の維持に重点を置き，発言を抑制する傾向があることを指摘し，このような青年の対人関係に求められるのは，対立を避けて自分が言いたいことを我慢するのではなく，逆に自分の意見を一方的に押し付けるのでもないコミュニケーションの取り結び方である，と述べている。対人関係を通して発達する自己表現能力は，家族関係や対人関係の中で発達する社会的スキル

の 1 つであり，社会的場面において人と人とが互いに適切な距離を保ち，好ましい人間関係を維持する上で必要となるが (玉瀬・越智・才能・石川, 2001)，偽相互性の特徴を持つ家族で育った人は，家庭環境の中で適切な自己表現能力を獲得するのが難しく，現代青年の対人関係の特徴は，本人のアサーション能力の未獲得の問題に限らず，アサーション能力を獲得し難いような家族関係，家庭環境が影響すると考えられる。しかし，青年のノン・アサーティブな自己表現能力の特徴，及びそのような自己表現の傾向と，家族の偽相互性の関連性について検討した研究はない。そこで本研究では，現代青年の家族成員間の相互作用のあり方と，現代青年のノン・アサーティブな自己表現のあり方，つまり他者を優先し，他者との対立や葛藤を避けるために自分を抑制し，自己表現をしないという発言抑制傾向との関連性を検討することを目的とする。

4. 偽相互性を説明するための家族理論

本研究では，Olson, Sprenkle, & Russel (1979) が作成した家族円環モデルの概念である家族の凝集性 (cohesion) と適応性 (adaptability) を用いて偽相互性の特徴を想定する。凝集性とは家族成員間の心理的距離を指し，適応性とは家族内外の出来事に対する家族の力構造，役割関係，関係性のルールを指す (田村, 1993)。偽相互性の家族は，家族成員間の結びつきが強く，自身よりも他の家族成員や家族集団の意志を尊重し，家族の適応性は硬直状態 (立木, 1999) であるため，普遍的な役割構造から独立することに強い憂慮を感じると考えられる。そこで，凝集性が高く，適応性が低い家族機能状態を偽相互性の特徴であると想定した。

研究 1

目的

青年が認知する家族機能状態と発言抑制傾向との関連性を明らかにし，家族の凝集性が高く，適応性が低いと想定した偽相互性の特徴と，青年の発言抑制傾向との関連性について検討する。また，偽相互性では，家族関係が良好であると表面的には主張するが，実際には自身の欲求を抑制し，強い葛藤やストレスを抱えていると考えられる。そこで，家族満足度についても調査し，家族機能状態と家族満足度との関連性も明らかにする。仮説として，家族機能の凝集性が高く，適応性が低い青年の発言抑制傾向は高く，家族満足度は低くなると考えられる。

方法

1. 調査対象者

大学生 310 名 (男性 163 名，女性 145 名，不明 2 名)。平均年齢 19.98 歳 (SD = 1.18)。

2. 手続き

集団法による質問紙調査を実施。

3．質問紙尺度

1) Family Assessment Inventory (以下 FAI) (西出, 1993) :「親密で自由な家族内交流」,「家族に対する評価・凝集性」,「家族組織の柔軟性・構成度」,「家族内の秩序・ルール」の 4 因子構造。全 30 項目 6 件法。

2) 発言抑制に関する尺度 (畑中, 2003) :「相手志向尺度」,「自分志向尺度」,「関係距離確保尺度」,「規範・状況尺度」,「スキル不足尺度」の 5 因子構造。全 41 項目 5 件法。

3) 家族満足度尺度 (岡本, 1990) : 1 因子構造。全 14 項目 5 件法。

4) フェイス項目 : 性別，年齢，学年，家族構成。

結果

1．使用した尺度の因子構造

使用した 3 尺度に因子分析を行った結果，FAI では 4 因子構造が得られた。第 1 因子は 17 項目で構成され,「私の家庭は，私が心のよりどころにできる場所である」,「家族は私の気持ちをよく理解してくれている」など，親密で自由な家族内交流や，家族の凝集性を表す項目が高い負荷を示していたため,「凝集性」因子と名付けた (α=.936)。「凝集性」因子の得点が高ければ，家族機能の凝集性が高くなると考えられる。第 2 因子は 6 項目で構成され,「私の家族は自分の言い分をあまり口に出さない」,「私の家ではお互いに気持ちをぶつけることができない」など，家族内の役割やきまりが明確であり，一度決まると変えられないという融通の利かなさ，また，自分の言い分や気持ちを口に出せないという項目が高い負荷を示していたため,「柔軟性の低さ」因子と名付けた (α=.669)。「柔軟性の低さ」因子の得点が高ければ，家族機能の適応性は低くなると考えられる。第 3 因子は 3 項目で構成され,「私の家では，話し合いをしてもなかなかうまくまとまらないことが多い」,「自分のやろうとすることが，家族に妨げられている感じがすることがある」など，家族での話し合いのまとまらなさ，問題解決が上手くいかない，個人の動向が家族に妨げられるという項目が高い負荷を示していたため,「秩序の無さ」因子と名付けた (α=.687)。「秩序の無さ」因子の得点が高ければ，家族の適応性は低くなると考えられる。第 4 因子は,「私の家には，きまりがあるのかどうかはっきりしない」,「私の家には，しっかりとしたきまりはない」の 2 項目で構成されていたため,「きまりの曖昧さ」因子と名付けた (α=.783)。この因子は他の因子との相関は低く，2 項目で家族機能を測定するとは言い難いと判断し，本研究では「家族のきまり」因子は使用しないこととした。

発言抑制に関する尺度では 6 因子構造が得られた。第 1 因子は 11 項目で構成され,「相手を傷つけてでも言いたいことを言う」,「たとえ自分の評価が悪くなろうとも，言いたいことは言う」など，相手を傷つけたり，自分への評価や場の雰囲気に関わらず言いたいことを言うという項目が高い負荷を示していたため,「積極的発言」因子と名付けた (α=.884)。なお,「積極的発言」因子の得点が高ければ，発言抑制は行われずに相手への配慮や自分への評価に関わらず発言をする傾向が強くなると考えられる。第 2 因子は 8 項目で構成され,「伝えたいことを上手に言葉に出来ないことがある」,「人と話すのが下手だと感じる」など，自分の言いたいことや気持ちを上手く言えない，話すのが下手であるために発言を控える内容の項目が高い負荷を示していたため,「スキル不足のための発言

抑制」因子と名付けた (α=.859)。第 3 因子は 5 項目で構成され，「場を乱すような発言は差し控える」，「場の雰囲気を考慮して発言を控えることがある」など，場の雰囲気や状況を考慮して発言を控える内容の項目が高い負荷を示していたため，「規範・状況考慮のための発言抑制」因子と名付けた (α=.818)。第 4 因子は 5 項目で構成され，「相手を不快にしないために，発言を控えることがある」，「自分の立場をわきまえて，発言を差し控えることがある」など，相手を不快にさせないように，また，自分の立場を考慮して発言を控える内容の項目が高い負荷を示していたため，「自他考慮のための発言抑制」因子と名付けた (α=.723)。第 5 因子は 4 項目で構成され，「拒否されるかもしれないという思いから，発言を控えることがある」，「見くびられないために，発言を控えることがある」など，相手に拒否・否定されることへの恐れから発言を控える内容の項目が高い負荷を示していたため，「自尊心保持のための発言抑制」因子と名付けた (α=.737)。第 6 因子は 5 項目で構成され，「これ以上親しくなりたくない人には，言おうとした発言も控える」，「あまりかかわりたくない人の発言に，反論の余地があっても放っておく」など，相手と意図的に距離を置くために発言を控える内容の項目が高い負荷を示していたため，「関係距離確保のための発言抑制」因子と名付けた (α=.662)。

家族満足度尺度では 2 因子構造が得られたが，小岩 (2008) 同様に尺度全体の内的一貫性を検討したところ，内的一貫性が確認された (α=.829)。そこで，本研究でも 1 因子構造で用いることが妥当であると判断した。

2．使用した尺度の関連性の検討

FAI の凝集性得点と適応性得点の平均値を基準に 4 群に分け (凝集性・適応性 : 高高群，高低群，低高群，低低群)，発言抑制傾向と家族満足度との関連を調べるために分散分析を行った。家族機能状態の高低による発言抑制傾向の得点と家族満足度の得点の平均値，及び *SD* を Table 1 に示し，家族機能状態と発言抑制傾向，及び家族満足度との分散分析の結果を Table 2 に示した。

家族機能状態と発言抑制傾向との関連性を検討した結果，家族の凝集性と「スキル不足のための発言抑制」，「規範・状況考慮のための発言抑制」，「規範・状況考慮のための発言抑制」に関連が見られた (F (1,306) = 6.70, p < .05 ; F (1,306) = 4.85, p < .05 ; F (1,306) = 2.82, p < .10) (Table 2)。また，家族の適応性と「自尊心保持のための発言抑制」，及び家族満足度に関連が見られた (F (1,306) = 2.83, p<.10 ; F (1,306) = 84.41, p < .01) (Table 2)。

考察

1．家族機能状態と発言抑制傾向との関連性

家族の凝集性と発言抑制傾向との関連から，家族の凝集性が低い傾向にある者は，自身の発言スキルのなさを意識して発言を抑制したり，他者との距離を取るために発言を抑制する傾向があることがわかった。また，家族の凝集性が高い傾向にある者は，その場の状況や，集団内のルールを守ることを意識して発言を抑制する傾向があることがわかった。このことから，家族成員間の結びつきが弱く，親密な雰囲気が保たれていないという認識と，言いたいことがうまく言えないと感じ

Table 1
家族機能状態の高低による発言抑制傾向得点と家族満足度得点の平均値，及び *SD*

家族機能状態	全体	凝集性		適応性		凝集性・適応性			
		高群 (*N*=162)	低群 (*N*=148)	高群 (*N*=168)	低群 (*N*=142)	高高群 (*N*=62)	高低群 (*N*=100)	低高群 (*N*=106)	低低群 (*N*=42)
積極的発言	2.69	2.64	2.74	2.73	2.64	2.74	2.58	2.72	2.78
	(.72)	(.74)	(.69)	(.76)	(.66)	(.81)	(.69)	(.74)	(.57)
スキル不足	3.25	3.13	3.38	3.33	3.16	3.20	3.09	3.40	3.33
	(.70)	(.70)	(.67)	(.69)	(.70)	(.72)	(.69)	(.66)	(.72)
規範・状況考慮	3.96	4.04	3.88	3.93	4.00	4.00	4.06	3.88	3.86
	(.61)	(.59)	(.62)	(.63)	(.58)	(.60)	(.58)	(.64)	(.55)
自他考慮	3.74	3.78	3.71	3.75	3.74	3.81	3.76	3.71	3.69
	(.58)	(.54)	(.62)	(.58)	(.59)	(.46)	(.58)	(.63)	(.61)
自尊心	3.27	3.29	3.25	3.33	3.20	3.40	3.23	3.29	3.15
	(.77)	(.75)	(.78)	(.75)	(.78)	(.71)	(.78)	(.77)	(.80)
関係距離確保	3.55	3.48	3.62	3.59	3.50	3.56	3.44	3.61	3.64
	(.62)	(.64)	(.59)	(.57)	(.67)	(.50)	(.71)	(.61)	(.55)
家族満足度	3.01	2.99	3.02	3.15	2.86	3.15	2.83	3.15	2.89
	(.30)	(.02)	(.02)	(.02)	(.02)	(.03)	(.03)	(.02)	(.04)

上段：平均値，下段：*SD*

Table 2
家族機能状態と発言抑制傾向，及び家族満足度との分散分析結果

家族機能状態	主効果		交互作用
	凝集性	適応性	
積極的発言	1.11	.36	1.69
	(*n.s.*)	(*n.s.*)	(*n.s.*)
スキル不足	6.70*	1.19	.04
		(*n.s.*)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	4.85*	.07	.37
		(*n.s.*)	(*n.s.*)
自他考慮	1.29	.25	.03
	(*n.s.*)	(*n.s.*)	(*n.s.*)
自尊心	.97	2.83†	.05
	(*n.s.*)		(*n.s.*)
関係距離確保	2.82†	.38	1.00
		(*n.s.*)	(*n.s.*)
家族満足度	.82	84.41**	.74
	(*n.s.*)		(*n.s.*)

上段：*F* 値
†$p < .10$，*$p < .05$，**$p < .01$

たり，自信を持って話すことが苦手で自分の気持ちを伝えられないと感じる傾向や，他者との関わりを避けるために発言を控える傾向に関連があると言える。家族間の結びつきが弱くなると，家族成員とのコミュニケーションが十分に行われず，他者と会話するための社会的スキルが習得されないために，自身の発言に自信が持てなくなると考えられる。また，他の家族成員に必要以上に干渉されたくないと感じ，距離を取るために発言抑制の傾向が強くなると考えられる。

また，家族成員の結びつきが強く，親密な雰囲気が保たれているという認識と，場の雰囲気を乱さないように発言を控える傾向に関連があることがわかった。このような傾向を持つ青年は，親密な雰囲気を乱さないために発言を控える，または発言を控えることで親密な雰囲気を乱さないようにしていると考えられる。家族内の雰囲気を保つために発言抑制を行っているようにも考えられるが，自身の発言欲求よりも家族内の雰囲気を優先させ，自己犠牲的に発言を抑制しているとも考えられる。

家族の適応性と発言抑制傾向との関連から，家族の柔軟性が低く秩序がないと感じる傾向にある者は，相手から否定され嫌われることを恐れて発言を抑制する傾向があることがわかった。家族成員がお互いに対して言い分を口に出さず，話し合いはまとまらない状態であり，役割分担やリーダーシップに融通が利かない状態であると，自分の意見を述べても家族がまとまることは難しく，受け入れてもらえない可能性がある。そのため，自身の家族の適応性が低いと感じる場合，相手からの否定を恐れ，自分自身を守るために発言を抑制する傾向が強まると考えられる。

2．家族機能状態と家族満足度との関連性

家族の適応性が高い傾向にある者は，家族満足度の得点が高い傾向にあることがわかった。つまり，家族がお互いに対して言い分を口に出さず過干渉ではない，家族の役割分担やリーダーシップが決まっている状態であるという認識は，青年の家族満足度の高さと強く関連すると考えられる。

3．家族機能に見られる偽相互性の特徴

本研究では，家族機能状態と発言抑制傾向に交互作用は見られず，家族の凝集性が高く，適応性が低いと想定した偽相互性の特徴と，青年の発言抑制傾向との関連性は明らかにされなかった。家族の偽相互性の特徴を測定するための理論はこれまでに提唱されていないため，今後は家族の偽相互性の概念を整理し，偽相互性の特徴を測定し得る家族機能状態尺度を再度検討する必要がある。

また，本研究では Olson et al の家族円環モデル理論の概念を用いて，家族の偽相互性の特徴を想定したところ，家族の凝集性の低さと発言スキルの不足による発言抑制傾向，及び他者との距離を確保するための発言抑制傾向，家族の凝集性の高さと集団の規範や場の状況を考慮するがゆえの発言抑制傾向，家族の適応性の低さと相手に嫌われることを恐れ自己の傷つきを避けるための発言抑制傾向が関連することが明らかになり，家族機能の凝集性，及び適応性の側面がそれぞれ発言抑制傾向を引き起こす動機や状況と関連することが示唆された。このことから，青年の発言抑制傾向には必ずしも青年本人が抱える発言スキルの問題や心理的な問題だけが関連しているわけではなく，家族機能の状態も関連している可能性があり，発言抑制に関する悩みを抱える青年への臨床的アプ

ローチとして，青年が認知する家族機能の状態を検討することの有用性が示唆された。

研究２

目的

家族全体と家族成員間の関係を客観的に評価できる (築地, 2005) シンボル配置技法の一つである家族イメージ法 (Family Image Technique：以下 FIT) (亀口, 2003) を用いて，青年がイメージする家族像を捉え，家族構造の様態と発言抑制傾向，及び家族満足度との関連性を検討する。仮説として，偽相互性の特徴が見られる家族イメージを持つ青年の発言抑制傾向は高く，家族満足度は低くなると考えられる。

方法

1．調査対象者

研究 1 の調査対象者のうち，研究 2 への参加承諾の得られた 46 名 (男性 12 名，女性 34 名)。平均年齢 20.11 歳 ($SD = 1.30$)。

2．手続き

個別法，または最大 3 名の集団法形式による投影法を実施。

3．投影法

FIT：円形シールを家族成員に見立て，一辺 15cm の枠内に配置させる。シールの濃淡，配置，向き，距離，線の種類などから総合的に家族関係を査定する。Figure 1, 2 に本研究で得られた大学生の FIT の典型例を示した。

結果

FIT マニュアル (亀口, 2003) に基づき，「両親の位置関係」，「両親の向き」，「両親の結びつきの強さ」，「両親のパワー」，「本人の親への向き」，「親との位置関係」，「本人のパワー」，「親子間の距離」，「家族の占有率」の 9 項目を得点化し，発言抑制傾向と家族満足度との関連性を分散分析，及び t 検定を用いて検討した。

1．両親の関係性と発言抑制傾向との関連性

「両親の位置関係」では「積極的発言」との関連に有意傾向が見られ ($F(2,43) = 3.176$, $p < .10$), Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，両親の位置関係が「タテ」群と「ナナメ」群の得点の差に有意傾向が見られた ($p < .10$) (Table 3)。「両親の結びつきの強さ」では「関係距離確保のための発言抑制」との関連において，両親の結びつきの強さが「強くはない」群と「強い」群の得点の差に有意傾向が見られた ($t = 1.791$, $df = 44$, $p < .10$) (Table 4)。「両親のパワー」では「積極的発言」との関連において，両親のパワーが「強くはない」群と「強い」群の得点に有意差が見られた ($t =$

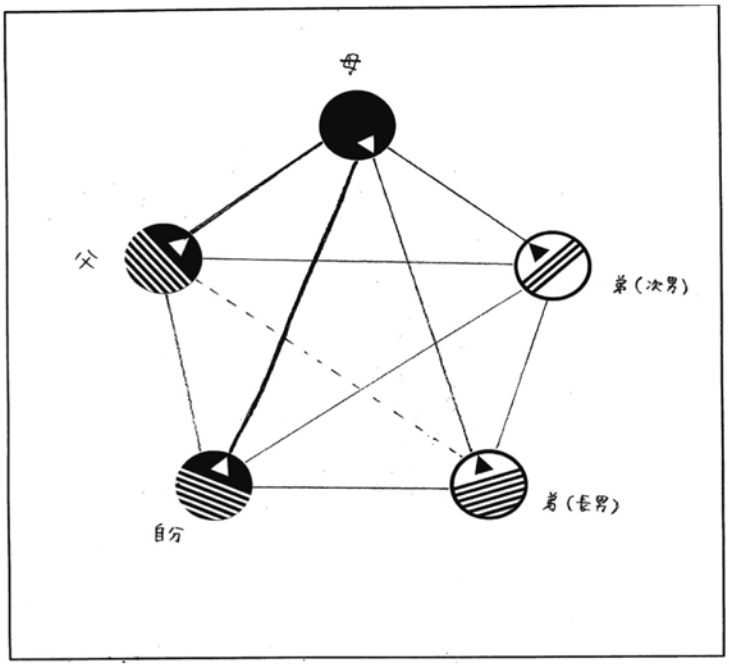

Figure 1 大学生 (22 歳女性) の FIT

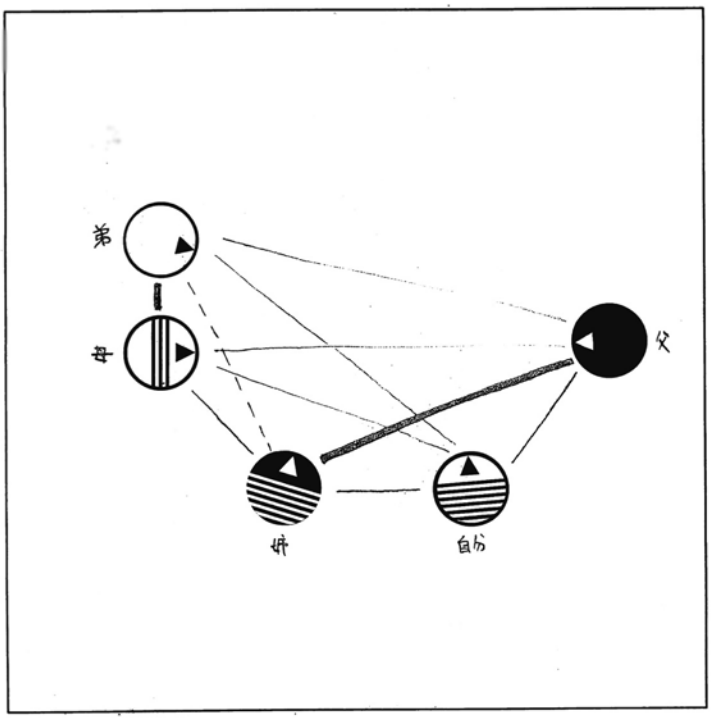

Figure 2 大学生 (21 歳男性) の FIT

Table 3

両親の位置関係による発言抑制傾向の各得点と分散分析結果

	全体(N=46)	両親の位置関係			F 値
		ヨコ(N=22)	タテ(N=8)	ナナメ(N=16)	
積極的発言	2.71	2.78	3.11	2.42	3.176†
	(.69)	(.67)	(.66)	(.63)	
スキル不足	2.96	2.91	3.04	2.98	.159
	(.59)	(.64)	(.45)	(.61)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.86	3.83	3.71	.463
	(.49)	(.53)	(.36)	(.51)	(*n.s.*)
自他考慮	3.85	3.88	3.89	3.78	.128
	(.68)	(.73)	(.54)	(.70)	(*n.s.*)
自尊心	3.40	3.38	3.41	3.42	.016
	(.66)	(.62)	(.71)	(.71)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.17	3.54	3.47	1.349
	(.69)	(.66)	(.58)	(.77)	(*n.s.*)

上段：平均値，下段：*SD*

†$p < .10$

Table 4

両親の結びつきの強さによる発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N =46)	両親の結びつきの強さ		t 値
		強くはない(N =20)	強い(N =26)	
積極的発言	2.71	2.70	2.72	-.101
	(.69)	(.78)	(.62)	(*n.s.*)
スキル不足	2.96	2.95	2.96	-.066
	(.59)	(.68)	(.52)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.78	3.82	-.240
	(.49)	(.32)	(.60)	(*n.s.*)
自他考慮	3.85	3.79	3.89	-.511
	(.68)	(.56)	(.76)	(*n.s.*)
自尊心	3.40	3.40	3.40	.000
	(.66)	(.54)	(.75)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.54	3.18	1.791†
	(.69)	(.52)	(.78)	

上段：平均値，下段：*SD*

†$p < .10$

Table 5

両親のパワーによる発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N =46)	両親のパワー		t 値
		強くはない(N =17)	強い(N =19)	
積極的発言	2.71	2.35	2.92	-2.990**
	(.69)	(.48)	(.71)	
スキル不足	2.96	2.88	3.00	-.631
	(.59)	(.64)	(.56)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.80	3.80	-.029
	(.49)	(.50)	(.50)	(*n.s.*)
自他考慮	3.85	3.69	3.94	-1.092
	(.68)	(.81)	(.58)	(*n.s.*)
自尊心	3.40	3.18	3.53	-1.763 †
	(.66)	(.61)	(.66)	
関係距離確保	3.34	3.19	3.43	-1.111
	(.69)	(.55)	(.76)	(*n.s.*)

上段：平均値，下段：*SD*

† $p < .10$，** $p <. 01$

-2.990, $df = 44$, $p < .01$)。また，「自尊心保持のための発言抑制」との関連において，両親のパワーが「強くはない」群と「強い」群の得点の差に有意傾向が見られた ($t = -1.763$, $df = 44$, $p < .10$) (Table 5)。なお，「両親の向き」と発言抑制傾向との関連には有意な関連は見られなかった。

2．本人と親との関係性と発言抑制傾向との関連性

「親との位置関係」では「関係距離確保のための発言抑制」との関連において，本人の両親との位置関係が「親より下」群と「親と同じ・親より上」群の得点の差に有意傾向が見られた ($t = -1.766$, $df = 44$, $p < .10$) (Table 6)。「本人のパワー」では「規範・状況考慮のための発言抑制傾向」と「自他考慮のための発言抑制」において，本人のパワーが「強くはない」群と「強い」群の得点の差に有意傾向が見られた (それぞれ $t = -1.746$, $df = 44$, $p < .10$; $t = -1.915$, $df = 44$, $p < .10$) (Table 7)。「親子間の距離」では「積極的発言」との関連において，親子間の距離が「親子間＜両親感」群と「親子間≧両親間」群の得点の差に有意傾向が見られた ($t = -1.771$, $df = 44$, $p < .10$) (Table 8)。なお，「本人の親への向き」と発言抑制傾向には有意な関連は見られなかった。

3．家族全体へのイメージと発言抑制傾向との関連性

「家族の占有率」では「積極的発言」との関連において，家族の占有率が「平均より狭い」群と「平均以上」群の得点の差に有意傾向が見られた ($t = 1.848$, $df = 44$, $p <.10$)。また，「規範・状況考慮のための発言抑制」，「自他考慮のための発言抑制」との関連において，家族の占有率が「平均より狭

Table 6

親との位置関係による発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N=46)	親との位置関係		t 値
		親より下(N=27)	親と同じ・親より上(N=19)	
積極的発言	2.71	2.61	2.85	-1.159
	(.69)	(.72)	(.63)	(*n.s.*)
スキル不足	2.96	2.92	3.01	-.546
	(.59)	(.65)	(.51)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.86	3.71	1.009
	(.49)	(.51)	(.47)	(*n.s.*)
自他考慮	3.85	3.92	3.74	.851
	(.68)	(.69)	(.66)	(*n.s.*)
自尊心	3.40	3.43	3.35	.407
	(.66)	(.61)	(.73)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.19	3.55	-1.766†
	(.69)	(.74)	(.57)	

上段：平均値，下段：*SD*

$^{\dagger}p < .10$

Table 7

本人のパワーによる発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N=46)	本人のパワー		t 値
		強くはない(N=31)	強い(N=15)	
積極的発言	2.71	2.67	2.81	-.647
	(.69)	(.66)	(.75)	(*n.s.*)
スキル不足	2.96	3.00	2.86	.768
	(.59)	(.55)	(.67)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.72	3.98	-1.746†
	(.49)	(.51)	(.41)	
自他考慮	3.85	3.72	4.11	-1.915†
	(.68)	(.64)	(.68)	
自尊心	3.40	3.36	3.49	-.619
	(.66)	(.68)	(.63)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.35	3.32	.114
	(.69)	(.66)	(.78)	(*n.s.*)

上段：平均値，下段：*SD*

$^{\dagger}p < .10$

Table 8

親子間の距離による発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N=46)	親子間の距離		t 値
		親子間＜両親間(N=19)	親子間≧両親間(N=27)	
積極的発言	2.71	2.50	2.86	-1.771 †
	(.69)	(.78)	(.58)	
スキル不足	2.96	2.92	2.98	-.300
	(.59)	(.64)	(.56)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.80	3.80	-.007
	(.49)	(.49)	(.50)	(*n.s.*)
自他考慮	3.85	3.88	3.82	.323
	(.68)	(.84)	(.55)	(*n.s.*)
自尊心	3.40	3.42	3.39	.135
	(.66)	(.76)	(.59)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.42	3.28	.671
	(.69)	(.83)	(.59)	(*n.s.*)

上段：平均値，下段：*SD*

$^{\dagger}p < .10$

Table 9

家族の占有率による発言抑制傾向得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(N=46)	家族の占有率		t 値
		平均より狭い(N=26)	平均以上(N=20)	
積極的発言	2.71	2.54	2.91	1.848 †
	(.69)	(.55)	(.79)	
スキル不足	2.96	3.03	2.87	-.872
	(.59)	(.47)	(.71)	(*n.s.*)
規範・状況考慮	3.80	3.64	3.99	2.538 *
	(.49)	(.46)	(.47)	
自他考慮	3.85	3.61	4.13	2.824 **
	(.68)	(.67)	(.59)	
自尊心	3.40	3.31	3.51	1.039
	(.66)	(.73)	(.59)	(*n.s.*)
関係距離確保	3.34	3.28	3.41	.637
	(.69)	(.86)	(.52)	(*n.s.*)

上段：平均値，下段：*SD*

$^{\dagger}p < .10$，$^{*}p < .05$，$^{**}p < .01$

い」群と「平均以上」群の得点に有意差が見られた（それぞれ $t = 2.538$, $df = 44$, $p < .05$; $t = 2.824$, $df = 44$, $p < .01$) (Table 9)。

3．FIT と家族満足度との関連性

「両親の位置関係」と家族満足度に有意な関連が見られ（$F(2,43) = 3.584$, $p < .05$），Bonferroni 法による多重比較を行ったところ，両親の位置関係が「タテ」群と「ナナメ」群の得点に有意差が見られた（$p < .05$) (Table 10)。また，「本人の親への向き」と家族満足度との関連において，本人の親への向きが「相反・平行」群と「向き合い」群の家族満足度得点に有意差が見られた（$t = -2.139$, $df = 44$, $p < .05$) (Table 11)。

Table 10

両親の位置関係による家族満足度得点の平均値，及び *SD* と分散分析結果

	全体（*N* =46）	両親の位置関係			*F* 値
		ヨコ（*N* =22）	タテ（*N* =8）	ナナメ（*N* =16）	
家族満足度	3.63	3.69	3.20	3.76	3.584*
	(.53)	(.55)	(.56)	(.40)	

上段：平均値，下段：*SD*

* $p < .05$

Table 11

本人の親への向きによる家族満足度得点の平均値，及び *SD* と *t* 検定結果

	全体(*N* =46)	本人の親への向き		*t* 値
		相反・平行(*N* =6)	向き合い(*N* =40)	
家族満足度	3.63	3.21	3.69	-2.139*
	(.53)	(.56)	(.51)	

上段：平均値，下段：*SD*

* $p < .05$

考察

1．FIT と発言抑制傾向との関連性

本研究では，FIT に見られる青年の家族イメージと発言抑制傾向との関連性を明らかにすることができた。

青年が抱く家族イメージにおいて，両親の位置関係が「ナナメ」の位置にある場合よりも「タテ」の位置にある方が，相手を傷つけたり，自分への評価や場の雰囲気に関わらず言いたいことを言う傾向が強いことがわかった。両親が「タテ」の関係にあることは，片方の親が他方の親の上位に位置することを意味しており，両親が対等というよりは，上位に位置する親の方が“偉い・強い”と

いうイメージ (柴崎・丹野・亀口, 2001) を青年が抱いていると考えられ，このような両親イメージを持つ青年は，発言場面において相手への配慮や自分への評価，場の雰囲気に関わらず積極的に発言する傾向があると言える。両親が強い絆で結ばれており，親密な関係にあるイメージを持つ青年は，相手と意図的に距離を置くために発言を控える傾向が弱いことがわかった。また，両親が発言力や影響力，元気の良さがあるというイメージを持つ青年は，相手を傷つけたり，自分への評価や場の雰囲気に関わらず発言をする傾向が強いことがわかった。このことから，両親間の絆の強さや両親のパワーの強さは，青年が他者と関わる際に距離を取るために発言を控える傾向を弱くし，積極的に発言を行う傾向を強くすることと関連すると言える。一方，両親のパワーは，相手に拒否・否定され，嫌がられることを恐れるために発言を控える傾向の強さとも関連しており，青年が他者と関わる際，相手に発言力や影響力があると認識する場合には，相手から拒否・否定されないように発言を控える傾向があると考えられる。

青年の家族イメージにおいて，青年本人の位置が親と同じ高さ，もしくは親よりも上に位置づけられていることと，他者との距離を置くために自身の発言を抑制するという傾向が関連することがわかった。FIT 上のシールの位置は，上位にあるほど“偉い・強い”という意味合いがあるとされている (柴崎ら, 2001) ことから，青年本人が親よりも“偉い・強い”とイメージする青年は，自身と目上の人物との関係性と，意図的に距離を置くために発言を抑制する傾向が関連すると考えられる。また, 家族内において青年本人に発言力や影響力, 元気の良さがあるとイメージしている場合，場の雰囲気や状況を考慮して発言を控えたり，相手を不快にさせないように，また自分の立場を考慮して発言を控える傾向が強いとわかった。このことから，青年本人が家族内で発言力や影響力があるとイメージしている場合でも，他者との関わりの中ではその場の雰囲気や相手に配慮し，自分の立場をわきまえて発言を抑制することが示唆された。家族内において，自身にパワーがあるとイメージしている青年は，その場の状況や自他へ配慮することができ，そのために発言を抑制するという自己コントロール能力を持つと考えられる。親子間の距離よりも両親間の距離が近いイメージを持つ青年は，相手を傷つけたり，自分への評価や場の雰囲気に関わらず発言をする傾向が強いことがわかった。親子間の距離よりも両親間の距離が近いイメージは，青年期における親からの自立を表していると考えられ (茂木, 2002)，このような家族イメージを持つ青年は，自身の発言を抑制するのではなく，より積極的に自己主張を行う傾向にあると考えられる。

FIT の「家族の占有率」からは，より大きな家族イメージ図を作成する青年は，相手を傷つけたり，自分への評価や場の雰囲気に関わらず言いたいことを言う傾向が強いこと，場の雰囲気や状況を考慮して発言を控えたり，相手を不快にさせないように，また自分の立場を考慮して発言を控える傾向が強いことがわかった。「積極的発言」と「規範・状況考慮のための発言抑制」及び「自他考慮のための発言抑制」は内容が相反しているが，いずれも家族の占有率が広くなる傾向との関連性が見られた。「家族の占有率」は，家族成員間の心理的空間を表しており，面積が小さいほど家族成員間の心理的空間が狭く，相互の心理的距離が密接である (大下・亀口, 1999)。このことから，家族成員間の距離が広い家族イメージを持つ者は，他者との関わりの中で自他や場の雰囲気を考慮せずに言いたいことを言う場合もあれば，自他や場の雰囲気を考慮して発言を控えることもあると考

えられる。自身の発言内容について自己をコントロールできる場面もあれば，できない場面もあると考えられる。このような発言場面における自己コントロールの不安定的さは，家族成員の心理的空間の広さや家族成員との心理的距離の遠さに対するイメージと関連すると考えられる。

なお,「両親の向き」と「本人の親への向き」では発言抑制傾向との有意な関連が見られなかったことから，本研究では両親の関心の向きや，本人の親に対する関心の向きは，青年の積極的発言の傾向，及び発言抑制傾向とは関連しないことが示唆された。

2．FIT と家族満足度との関連性

青年が親，または両親関係に関心を向けているというイメージと，家族に対する満足度の高さに関連があることがわかった。家族イメージにおいて青年が親へ関心を向けることは，親からの自立の時期でもある青年期にある大学生が，親との心理的・物理的距離を大きく取り，親の目の届かない世界で生活しようとする一方で，困ったときには相談に乗って欲しい，自分のことは忘れないで欲しい，自分の成長を望んで欲しいという，親に対する期待 (落合, 2002) を抱いていると考えられる。このような親に対する期待が強いことと家族満足度の高さが関連すると考えられる。

総合考察

1．本研究の成果

本研究は，現代青年の家族成員間の相互作用のあり方と，自己表現能力との関連性を見出すことを目的とした。家族成員間の相互作用のあり方では，家族の偽相互性の特徴に着目し，家族機能状態とノン・アサーティブな自己表現である発言抑制傾向との関連性について検討することとした。また，青年が認知する家族機能状態と家族満足度の関連性についても検討した。

研究 1 では，家族の偽相互性と想定した家族機能状態と青年の発言抑制傾向との関連性は見られなかった。しかし，家族機能の凝集性，及び適応性のそれぞれの側面と発言抑制傾向との関連性が明らかになった。対人場面において，自分の意見を主張できない，言いたいことを上手く伝えられないという発言抑制に関する悩みを抱える現代青年への臨床的アプローチとして，青年が認知する家族機能状態を検討することの有用性が示唆された。

研究 2 では，青年の抱く家族イメージを検討することで，発言抑制傾向と関連する家族成員間の状態や家族全体の状態が明らかになった。青年の発言抑制傾向は，青年と親との相互作用の状態や青年自身の家族内での影響力に対するイメージが関連するだけではなく，青年が抱く両親関係のイメージとも関連することが示唆された。社会的スキルである自己表現能力は，本来は家族成員との相互作用の中で習得されていくが (井上, 2007)，発言抑制傾向は他者同士のやりとりや関係性を客観的に捉えることからも習得されることが本研究から示唆された。

2．今後の課題

アサーションとは，自己尊重，他者尊重に基づく自己表現の形式であり，自分の気持ちを大切にしながら自分自身で自己表現の方法を選び，また自分も他者も尊重することである (用松・坂中,

2004)。意図的にノン・アサーティブな自己表現を選択することも，その場に適応し，より良い対人関係を形成・維持するための社会的スキルの 1 つであると考えられる。そこで今後は，青年の家族機能状態や家族成員間の相互作用の状態と青年のアサーション･スキルとの関連性をさらに検討し，対人場面において青年が適切なアサーション選択ができる家族機能状態を明らかにすることで，発言抑制に関する悩みを抱える現代青年への支援に有用な知見を見出すことができると考えられる。

また本研究では，家族の偽相互性の特徴を想定するために Olson et al の家族円環モデル理論を用いたが，家族の偽相互性と想定した家族機能状態と青年の発言抑制傾向との有意な関連性は明らかにされなかった。家族を対象とした査定には，家族内の特定の人間関係に焦点を当てるものと，家族全体やそのシステム全体を査定するものの 2 種類の方法がある (築地, 2005)。本研究では，家族成員のうち青年のみを調査対象としたが，より厳密な家族システムの機能状態を捉えるためには，他の家族成員も調査対象とし，多角的に家族機能状態を捉える必要があると考えられる。そのため今後の課題として，他の家族成員から見た家族機能状態も明らかにし，青年お自己表現能力との関連性を検討することが挙げられる。

引用文献

畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響　心理学研究, **74** (2), 95-103.

平木典子 (1993). アサーション・トレーニング――爽やかな自己表現のために――　日本・精神技術研究所

堀川徳子･柴山謙二 (2006). 現代の大学生に対するアサーション･トレーニングの効果について　熊本大学教育学部紀要人文科学, **55**, 73-83.

井上加奈恵 (2007). 家族の信念体系が家族成員のアサーション行動に及ぼす影響　立正大学心理学部臨床心理学科 2006 年度卒業生卒業論文・修士論文集, 22-36.

亀口憲治 (2003). FIT (家族イメージ法) マニュアル　システム心理研究所

小岩健祐 (2008). 大学生の親イメージと家族満足度との関連　家族心理学研究, **22** (1), 65-75.

南山浩二 (2002). 「精神分裂病家族」の規格化――<「治療」の対象から「教育」の対象へ>という推移に着目して――　静岡大学人文学部人文論集, **53** (1), 19-37.

Minuchin,S. (1974). *FAMILIES AND FAMILY THERAPY*　Harverd University Press. (山根常男(監) 家族と家族療法　誠信書房)

用松敏子・坂中正義 (2004). 日本におけるアサーション研究に関する展望　福岡教育大学紀要, **53** (4), 219-226.

茂木千明 (2002). 家族図式による現実と理想の家族関係の比較――家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から――　仙台白百合女子大学紀要, **7**, 29-43.

西出隆紀 (1993). 家族アセスメントインベントリーの作成――家族システム機能の測定――　家族心理学研究, **7** (1), 53-65.

落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一 (2002). ベーシック現代心理学 4　青年の心理学[改訂版]　有斐閣

岡本かおり (1990). 大学生の人生における実存的傾向と家族満足度について　家族心理学研究, **4** (2), 83-95.

Olson,D.H.,Sprenkle,D.H.,& Russell,C.S. (1979). Circumplex model of marital and family systems: Ⅰ. Cohesion and Adaptability dimensions, Family types, and clinical applications. *Family Prosess*, **18**, 3-28.

大下由美・亀口憲治 (1999). 中学 2 年生の家族イメージの研究――父，母，子の 3 者関係イメージ――　家族心理学研究, **13** (1), 1-13.

柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 (2001). 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析　家族心理学研究, **15**, 141-148.

玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討　奈良教育大学紀要, **50** (1), 221-232.

田村　毅 (1993). 日本人家族の適応力と凝集性に関する予備研究　FACES-Ⅲと FACESKGⅡの信頼性と妥当性の検討　東京学芸大学紀要 6 部門, **45**, 135-145.

築地典絵 (2003). 家族関係構造の査定法に関する検討　人間環境研究, **3** (1), 19-25.

Wynne,L.,Ryckoff,I.,Day,J., & Hirsch,S. (1958). Pseudo mutuality in the family relations of schizophrenics. *Psychiatry*, **21**, 205.

八木秀夫 (2010). 家族における相互作用と個人システムの境界の形成――接触と分離のバランス――　仁徳大学研究紀要人間学部篇, 25-33.